

皇太子殿下の容赦ない求愛

目次

皇太子殿下の容赦ない求愛

5

番外編 夏の日本にて

255

皇太子殿下の容赦ない求愛

序章 愛欲の楔に貫かれて

「う……ん、あ……っ、ア」

間接照明のみが光る豪華な部屋で、喘ぎ声が響く。

大人が四、五人は寝転がれる巨大なベッドの上で、優花は金髪の男性に組み敷かれ、熱い楔をその身に穿たれていた。

四つ這いで逃げようとしても、背後から男が覆い被さっているのも叶わない。

「——あ、優花、優花……っ、どこにも、行くな……っ」

切なげな男の声に、優花は頭が真っ白になり何も答えられない。

蕩けきった媚肉に、日本人のそれとは明らかにサイズの異なるモノが抉るように出入りしているのだ。

グチュグチュという水音が聞こえ、耳からも優花を攻め立てていく。

優花はゴブラン織りのクッションに縋り付き、いくらするかわからない上等な寝具に淫らな涎を垂らす。

「あ……っ、あ、あうっ、あああっ、ああーっ！ 駄目……っ、ダメえっ」

ブルブルと震える手が力なくシーツを握り、優花は悲鳴に似た嬌声を上げた。

その直後にせり上がった快楽が弾け、子宮が収斂する。

深く繋がっているのも、男は優花が達したことを理解したはずだ。だというのに耳元で歓喜の吐息が聞こえたかと思うと、より一層深い場所まで抉られた。

「ん、うーっ、ダメえ、も、ダメえっ、だか、らあ……っ」

あまりの快楽にこのままでは正気を保てないと思い、優花は泣きながら男に哀願する。

「ダメじゃない。もっと私に君を愛させてくれ」

男が背後で陶然とした笑みを浮かべたのが分かった。

激しいピストン運動は一旦止み、その代わりに男は腰で円を描くようにして優花を攻める。子宮口を切っ先でいじめ抜かれ、優花は掠れた悲鳴を上げてまた達した。

もはやどこにも縋ることも叶わない手足が、ビクビクツツと痙攣して跳ねる。

「あああああーっ！」

「私の気が済むまで、たっぷり付き合ってくれ」

男は恍惚として言い、優花の頭を撫でる。

その言葉に、優花は自分が彼にとっても愛されているのだと痛感しつつも、これでは自分もまたないのでは？ と懊悩する。

「……っ、おねが……っ、少し、やすま、せてっ」

「私の気が済むまで、と言っただろう？」

ふと優花の腰を掴んでいた男の手が、彼女の胸元に伸び、凝り立った赤い宝石を指の腹で優しく擦る。

胸の先を弄っていた手は優花の体のラインを辿って臀部まで届き、やがて濡れた茂みに到達する。そして爛熟した肉粒を遠慮なく弄り回してきたので、優花はまた男を強く締め付け達した。

「——っあ、ア、ああ、ん……っ、ア、あ」
クッションに体を押しつけたまま、優花は蕩けた顔をする。体の筋肉すべてが弛緩して、何一つ言うことを聞いてくれない。

男は最奥に亀頭をつけたまま、ぐりぐりと腰を回して優花を攻める。指の腹で膨れた肉粒をピタピタと素早く叩き、絶え間ない刺激を送り込んできた。

「——も、ダメえっ！ ゆるしてっ、許してえっ！」

顔をグシャグシャにして喘ぎ、優花は男に許しを乞うものの、本心ではこの状況を悦んでいた。

こんな——美しく誰もが求めるような存在が、自分を溺愛してくれている。

普通の日本人でしかない優花に「愛している」と情熱的に囁くのだ。

女としてときめかないはずがない。

「あ……っ、ア……——ああア」

最後に声までもが弛緩して、とうとう優花は全身の力を抜いて気を失った。

意識を手放したあと、快楽により体がビクビクッと動いたことを優花は知らない。

そうして痙攣して果てたあと、男が「優花？」と呼びかけたことも——

第一章 東京で

澄川優花は二十六歳で、フリーランスの通訳をしている。

父は大手自動車会社に勤めており、幼い頃は父の海外転勤について世界各地を転々としていた。

一番多かったのは東南アジアだが、アメリカやヨーロッパにいたこともある。

遠い記憶——まだ物心つくかつかないかぐらゐの頃に住んでいた美しい街並みは、あとになってフラクシニアという北欧にある小国だと聞かされた。

ヨーロッパの街並みのようであり、どこかオリエンタルな雰囲気もあり——。大人になった今もふと思えば、あの美しい街をまた歩きたいと思う。

高校生になる頃に、優花は日本に帰ってきた。

周囲とも打ち解けて高校生活を終え、どうせなので今までの経験を生かし、進学は海外の大学に行こうかと考えた。しかし家族が「せっかく日本に住めたのだから、家族全員一緒にいたい」と渋る。

結局将来何になりたいかということまでを考え、優花は語学が強みとなる職業——通訳を選んだのだ。

大学は通訳を育成する四年制に進み、そこそこのいい環境で楽しく過ごせた。

卒業後はフリーランスとして、まず両親のツテから仕事を探し、そこから徐々にエージェントに登録し仕事を得ていった。

最初こそは親に頼ってしまつたものの、通訳の仕事は実力・経歴主義だ。経験を培うためなら、何だつて利用する。

優花は英語、中国語、フランス語、ドイツ語、ロシア語と、少しだけイタリア語を話せる。加えて幼い頃フラクシニアという小国にいたので、その国の言葉も話せた。

こうして優花は、二十五歳になる頃には「信頼のできる若手通訳」という地位を確立した。現在、二十六歳の優花は宝石商の社長、富樫勝也と年単位の契約をしている。

勝也の会社『クラリティア・ビューティー』は台東区上野にあり、宝石の買い取りやデザイナーのオーダーメイドなどをしている。勝也は宝石鑑定士の資格を取り、自らバイヤーとして宝石産出国に赴いていた。

「それで、一週間後にフラクシニアに向かうのですかね？」

「ああ、今回も優花に同行してもらおう。あそこは良質なピンクダイヤやレッドダイヤが採れるから、以前から狙っていたんだ。それに優花はああたりに住んでいたことがあったんだつて？ だつたら適役だな」

年齢より若々しく見える勝也は三十五歳だ。趣味でサーフィンをしていて、パーティーも好きで、どちらかという派手な印象の男性だつた。

だが優花は勝也の仕事への熱意、宝石への深い知識や情熱を知っている。だからこそ彼と契約し

て仕事をするを選んだ。

「確かにフラクシニア語は話せます。……でも大体は英語で済んでしまいますけれどね？」

優花はパソコンを使ってフラクシニアのことを調べる。

「けどやっぱり、母国語を操れる相手だと印象がいいだろう？ 俺だつて海外の人と話をしている、相手が日本語を話すと『おっ』て思うよ」

「確かにそうかもしれませんがね。フラクシニアにいたのは幼い頃なので、日常会話は可能です。ですが商談は英語でしますからね？」

「OK、OK。頼りにしてるよ」

二人ともコーヒーを脇に、それぞれのパソコン画面を見ながら会話を続ける。

「あと、沙梨奈も連れて行くから、ホテルの部屋は女子同士仲良くな」

沙梨奈とは、足立沙梨奈という二十七歳の宝石鑑定士だ。

もともと美術系の大学を出ていて、宝飾デザイナーとして生計を立てたいと希望していたそうだが今の時代、宝飾デザイナーだけで生計を立てられるのは、ごく一部の売れっ子のみ。なので沙梨奈は宝石鑑定士の資格も取り、マルチに仕事ができるよう努力している。

「沙梨奈さんも行くんですね。それは確かに盛り上がりそう。でも商談の前夜に飲み明かすのだけはやめてくださいね？」

「それはさすがにしないつて」

優花の軽口に勝也は笑い、マウスをクリックしてから「お」と声を出す。

「フラクシニアの皇太子はやっぱりいい男だな。今回フラクシニアの鉱山に連絡をしたら、鉱山の見学のあとに皇太子殿下じきじきに挨拶があるっていうから……。こりゃあ、新聞載っちゃうかな？」

軽い調子で勝也が言うのを聞き、優花もフラクシニアの皇太子を検索する。

「アレクサンドル殿下でしょうか？ 確かに素敵ですね」

優花の視線の先には、金髪碧眼の美青年の画像がある。

北欧圏の国なので金髪の色が薄い。目の色も青というよりは、アイスブルーという表現が似合う気がする。

オーダーメイドのスーツを着こなし、女性なら誰もが憧れるのでは、という美丈夫だ。

「俺がいるのに他の男に見とれるなよ？

まあ、何はともあれ皇太子殿下からのお墨付きとなれば、フラクシニアでの買い付けも今後スムーズに行くと思う。すっかり頼むよ、優花。上手くいったら食事奢るから」

「お仕事はちゃんとしますよ？」

軽口のような優花の言い方に、勝也が笑った。

優花は勝也とこっそり付き合っており、交際して一年と少しだ。一緒に食事をし、キスをする仲ではあるが、まだそれ以上のことは許していない。

彼からプロポーズも受けており、古風な考え方かもしれないが、それなら色々なことをきちんと順番に……と考えている。

そうやって仕事も、プライベートと分けて真面目に取り組んでいた。

先ほどから話しているフラクシニアの案件に優花も同行するのだが、かなり大きな仕事なので身が引き締まる。それに加え、一国の皇太子と会食することが決まり緊張を隠せない。

皇太子は、「我が国は小国なので、ぜひ日本への土産話にフラクシニアのピーアールポイントを知ってほしい」と言っていたとのことだ。

勝也の取引先である鉱山の権利者がアレクサンドル皇太子と知り合いらしく、親日家の皇太子が興味を持って勝也を招待したのだとか。

「しかし運命ってどう転がるか分からないな。これが転機になって、うちの店が爆発的な人気になったりして、『フラクシニア皇太子お墨付き』とか。ほら、ピンクダイヤって稀少だけど女性に人気があるだろう？ SNSとかで上手く拡散したら、もしかするんじゃないか？」

「まあまあ、捕らぬ狸の皮算用って言いますし……。まずは出国。それから入国。商談が終わって帰国するまでが旅ですから、その後に考えましょう」

熱くなりやすい勝也を宥めると、彼はすぐに「そうだな」とクールダウンする。

「しかし優花が側にいてくれて助かるよ。言葉の壁だけじゃなくて、俺の扱いもいつの間にか上手になってるし」

「勝也さん、分かりやすいですからね」

プライベートの親しげな雰囲気を見せて言うと、勝也も含み笑いする。

「さて、出国に向けて準備を進めつつ、最新のニュースも集めておこう。相手さんの資料を集めて

も、まだまだ足りない部分があるかもしれない」

「はい」

気を引き締めて、優花は再び情報の海に飛び込んだ。

一週間後、優花は勝也と沙梨奈と共に飛行機に乗っていた。

飛行機の中で最新の映画を流しつつも、優花は資料を捲る手を止めない。

加えて宝石に関する専門用語の単語集も復習し、ついでにフラクシニア語のテキストも開く。フラクシニア語のテキストはかなりレアなもので、まず書店では買えない。今回の旅行が決まるとすぐにネットで検索して注文した。

載っているのは基本的な文法や単語だが、それでも正確な言葉を思い出すのに役立つしてくれる。

成田空港から乗り継ぎや待ち時間も含めて十二時間以上かけ、ようやくフラクシニアに到着した。

「うわぁ……涼しい！」

季節は六月。東京なら汗ばむ暑さだというのに、フラクシニアはひんやりとしていた。こちらの六月の平均気温は二十度前後らしい。

「夏はこっちで過ごしたいぐらいだなー」

半袖シャツの上にジャケットを羽織った勝也も、冗談なのか本気なのか分からないことを言っている。沙梨奈は半袖ワンピースにカーディガンなので、少しだけ寒そうだ。

「さっすが帰国子女！ 海外のこと詳しいわねえ」

優花は機内でゆったり過ごせるように、マキシ丈のスウェットワンピースを着ていた。その上にジージャンを着ているので沙梨奈よりは暖かいはず。

「とりあえずタクシーに乗ってホテルまで向かおうか」
三人ともガラガラとスーツケースのキャスターの音を立てつつ移動する。

空港から出ると、優花は看板などを見て勝也と沙梨奈を先導した。

「タクシー乗り場はこっちですね。日本で言う個人タクシーとタクシー会社の二種類がありますが、タクシー会社のもに乗りましょう」

沙梨奈は茶色に染めた髪をかき上げ、はやし立てるように優花を褒める。

沙梨奈の腰まであるロングヘアは、かなり色が明るい。髪が傷んでいてもおかしくないのに、艶々としていて綺麗だ。きつと美容室に通い詰め、トリートメントなどを念入りに受けているのだろう。

メイクもばっちりしていて、暇な時間があると優花に「どこのブランドの新商品がいい」などといった話題を振ってくる。「今日のリップは新色なの」と嬉しそうに言い、好きなことにお金を使って楽しんでる彼女の姿に微笑ましくなる。

いっぽう優花は、それほど自分の外見を飾ることに興味が持てない。ビジネスシーンで着る物は相手に舐められないよう良い物を買っているし、メイクや美容室もお金を掛けている。

だが、「自分が夢中になれるものとは何だろう？」と日々模索しているのが現状だ。

通訳の仕事は楽しいけれど、のめり込んで夢中になるというほどではない。もっと身を焦がすような情熱にさらされて、何かに夢中になりたい。そう思っているのだが、なかなか現実はその通りにいかない。

『ここまでお願いします』

タクシーのトランクにスーツケースを詰め、後部座席に三人で乗り込んだ優花はホテルの名前と住所が書いてあるメモを見せ、フラクシニア語で告げた。

空港がある海沿いの街から、フラクシニアの首都トウルフまでは一時間ほどだ。

『分かりました。お嬢さん、アジア人なのにフラクシニア語が話せるのですね』

金髪の中に白いものが混じっているタクシードライバーは、眼鏡の奥にある青い目を嬉しそうに燦めかせた。

『ずっと小さい頃にこちらに住んでいたんです。相変わらずとても美しい街並みですね』

車窓から見える景色は、白い壁にオレンジの屋根の街並みが続いている。

優花がフラクシニア語でタクシードライバーと話しているあいだ、勝也と沙梨奈は日本語で異国の街並みの感想を言い合っていた。

『日本人ですか？ 後ろの人の発音からそんな感じがしました』

『はい。仕事でフラクシニアに来ました』

『こっちは人は凄いな。こんなに涼しいのに半袖の人が多い』

行き交う人々が半袖を着ているのを見て、勝也が感嘆の声を上げる。

勝也の言葉を、優花はドライバーに訳して伝えた。するとバックミラー越しに彼が微笑んだ。

『こっちは冬が長いですからね。人々は夏になると積極的に日差しを浴びようとします。日本人はどうか分かりませんが、庭先にビーチチェアを置いて日光浴するのは珍しくありませんよ』

彼が言ったことを勝也に訳すと、彼は何度も頷いて納得していた。

「確かにこっちは人は髪も目も色が薄いからな。日光が少ないんだと思うよ。黒目黒髪の俺たちから見たら、綺麗で羨ましいことこの上ないけど。そうだ、優花。オススメの食べ物とか聞いてくれ」

勝也に言われ、優花はドライバーに尋ねる。

『フラクシニアで美味しい物って何ですか？』

『そうですね。主食はレイブというライ麦でできている黒パンです。ニンヤやウナギなども盛んに食べられています。同様にブラッド・ソーセージもよく食べますね。あとポークステーキを名物とする店も多いです。マッシュポテトやドイツのザワークラウトのような物もあります。ノルウェーサーモンもよく流通していますね』

優花越しにドライバーの話聞き、勝也と沙梨奈はもう明日の夕食に思いを馳せているようだ。

このあと人のいいタクシードライバーからフラクシニアの話聞きながら、ホテルまでの街並みを楽しんだ。

「はー！ 着いた！」

首都トウルフの中央部にあるホテルに到着すると、勝也はツインルームに一人、優花は沙梨奈と

同じ部屋で休憩する。

結花は勝也に求婚されているものの、返事を保留にしてもらっている。なのでこういう部屋割りにしてもらえるのは、非常にありがたかった。

食事は機内で取ったので、あとはホテル内のレストランで飲み物や軽食を食べ、眠りについた。

* * *

翌日はフラクシニアの空気に慣れることと、打ち合わせに一日を費やした。

フラクシニア到着三日目の早朝には、良質のダイヤが採れる鉱山へ向かう。

価値ある宝石を扱う仕事なので、緊迫したシーンもあった。しかし勝也と沙梨奈はダイヤやカラダイヤをじっくり見て、納得のいくものを買うことに成功した。

優花も彼らの言葉を同時通訳で伝えて商談の手助けをし、結果的に全員満足いく仕事ができたと気がする。

支払いを済ませ再びトウルフに戻る頃には、勝也は大量に宝石が入ったブリーフケースをしっかりと抱えていた。

「いい取り引きができたなあ」

「本当に、フラクシニアのカラダイヤは良質だったね」

「無事に終わって安心しましたが、これから着替えて気持ちも切り替えないと」

優花がそう言うと、勝也と沙梨奈は笑顔のままうなづく。

「分かってるよ。しかし移動中に見えたけど、遠目にも立派な宮殿だったよなあ」

「そうそう。私ヨーロッパ系のお城ってまともに入ったことなかったから、ドキドキするわあ」

この後は、フラクシニアの皇太子との晩餐会だ。

三人は昼食を食べなかったので、トウルフに戻ったあと店で軽食を買いホテルの部屋で食べている。本当はしっかり食べたかったのだが、宮殿の料理を残しては失礼だと思ったからだ。

「宮殿の食事、楽しみですね」

「そうだな。日本びいきの皇太子殿下へのお土産もすっかり買ってきたし」

それぞれ一国の皇太子に会う前なので、食事が終わり次第身だしなみを整えることにした。

「優花」

沙梨奈と二人でホテルの部屋に入る前に、勝也が呼び止めてくる。

「なに？」

沙梨奈を先に部屋に入れ、ドアを閉じてから優花は控えめな声で返事をした。

「その……。しつこいかもしれないけど、宮殿に行つてあのイケメン皇太子と会つても、惚れないでくれよ？」

浮気を心配する勝也に、優花はクシャツと笑ってみせる。

「もう、変な心配しないで。相手はよその国の皇太子殿下だよ？ 私のことなんか好きになるはずないじゃない」

そう言うと、勝也もやっと安心したようだ。

「そうだよな。……うん、そうだ。分かった。じゃあ、支度をしよう」

「うん。またあとで」

思わず笑みが零れ、優花は勝也と手を振り合ってから部屋に入った。

十七時になり、ホテルの前に黒塗りのリムジンが横づけされた。

運転手はヨハンという男性で、三十一歳らしい。北欧圏らしく金髪で、整った顔立ちをしている彼は、日本語が話せるのだという。

それぞれタキシードやイブニングドレスに着替えた優花たちは、リムジンに乗り込む。

ヨハンに、リムジンの中にある飲み物は自由にいいと言われた。だがさすがに、これから皇太子との晩餐を控えているのに手を出せる訳がない。

「あーあ、高級そうな酒だなあ」

目の前には上品なライトに照らされた酒のボトルがあり、磨き上げられたグラスも光っている。

「まあまあ。全部終わってから飲めばいいじゃないですか」

優花は落ち着いたワインレッドのドレスを着て、肩にシヨールを掛けていた。

華奢な肩紐や胸元のビジュ、足元までの裾や高いヒールなど、普段ではまず着ない服に緊張する。

沙梨奈は「何かキャバ嬢みたいだね」と言って笑っていたのだが、正直笑える気持ちではない。

緊張で変な汗まで掻いている。

気を紛らわそうと目を向けた窓の外からは、陽気な声があちこちで聞こえる。治安のいい国なので、ガイドブックには夜に出歩いても大丈夫だと書いてあった。

(さすがに大きなネット書店でも、王族に対するマナーを書いた本はなかったなあ)

昔の貴族の令嬢はどういう生活をしていた、などの資料本はある。しかし現代の一般日本人が海外の王族に会う時、どうすればいいのかが書かれた本はないのではと思う。

(とりあえずテーブルマナーだけは三人揃って頭に叩き込んだ。会話は私が頑張ればいい。さすがに……本場にワルツとかさういうのを踊るとかはないよね?)

リムジンの中で優花は難しい顔をして考え込む。

「まあまあ、優花。そんな顔するなよ。何とかなるって」

クラッチバッグを握り締めるようにして考え込む優花に、勝也はどこまでも明るい声で言うのだった。

しばらくすると、宮殿らしき大きな建物が見えてきた。

昔ながらの宮殿は、何度も修繕工事が行われている。昔の形を残しつつ、内部は住みやすくなっているそうだ。

もちろん、塔や牢獄など使われていない場所はある。空き部屋には宮殿が管理する美術品などが保管されているらしい。宮殿の一部は観光用に開放されているが、今回優花たちが招待されるのは奥にあるプライベートエリアだ。

宮殿前の跳ね橋を渡ると、目の前には薄暮の中ライトアップされた城がドンとそびえている。觀光エリアのあたりをグルリと回り、車は衛兵のいるゲートを通っていった。

「うわあ、緊張する……」

沙梨奈が呟いた時、車が裏口と思われる扉の前で停止した。

ヨハンがドアを開け、左側に座っていた女性二人をエスコートする。

「どうぞ、中へ」

ヨハンが言い、降車した先にあるドアに向かって進んでいく。ドアの両側には衛兵が立っていて、思わず日本人三人は会釈をした。

「わ、赤い絨毯だ」

三人が入った場所は白黒のタイルの上に赤い絨毯が敷かれた廊下だった。

廊下と言っても広々としていて、どこまでも左右に続く壁際には高価そうな絵画が掛かっている。「こちらです」

ヨハンが三人を先導し歩き始めた。よく見ると、彼は執事のような黒い燕尾服を着ていて体つきもいい。

「私は殿下の秘書や運転手、ボディガードなど、身の回りに関わる仕事をこなしております。他にも似た職に就いている者はいるのですが、年齢の近い私が常にお側にいるのがいいと、一任されております」

ヨハンは流暢な日本語を話すので、優花の出番がない。

「現在殿下はプライベートな用事を済ませておいでです。そのあいだ、私が皆様をお迎えに上がりました」

「ありがとうございます。ちなみに、私たちは皇太子殿下のことを何と呼べば？」

勝也の言葉に、ヨハンは感じのいい笑みを浮かべる。

「普通に殿下で構いませんよ」

皇太子を「殿下」と呼ぶのが「普通である」とサラリと言われ、勝也と沙梨奈はここが本当に日本ではない、他国なのだと思いついたという顔をする。

長い廊下の途中にはいくつも扉があり、やがてその内の一つの前でヨハンが立ち止まった。

「ここが迎賓室になっております。続き間にダイニングがございますので、まずは殿下とお話をされてからお食事をどうぞ」

「分かりました。あの……ヨハンさんはどうされますか？」

不安げな勝也の言葉に、彼はふわりと微笑む。

「同席致しますよ。私は殿下の身の回りのことを任せていますので、常にお側に控えさせて頂いております」

すると勝也は「俺たちだけだと心細いので、安心しました」と笑顔を見せた。

ヨハンがドアを開くと、まさしく「お城」というインテリアが目の前に広がる。

ロココ調のような華美な装飾のついた壁や天井を始め、ソファなどの家具もモダンな作りではなく女性的な印象を受けるものばかりだ。

勝也は優美なインテリアに落ち着かない様子だが、優花と沙梨奈は「お姫様みたい」と顔を見合わせてはしゃいだ。

どこか既視感があるような気もするが、きつと事前にフラクシニアについて調べた画像や、テレビで何度も流れる西洋のお城特集のせいだろう。加えて過去にヨーロッパで宮殿を見学したことがあるので、その記憶と混じっている可能性も高い。

「あ、じゃあまずこれ……。日本のお菓子とちよつとばかりのお土産なのですが、ヨハンさんから殿下に渡して頂けますか？ もちろん中を開けて確認して、毒味して頂いても構いませんから」

勝也が手に提げていた紙袋を差し出すと、ヨハンは「ありがとうございます」と微笑んで受け取った。

「お茶を淹れますから、どうぞお座りください」

優花たち三人はソファに座り、上座に当たる部分は皇太子であるアレクサンドルのために空けておく。

続き間に姿を消していたヨハンは、すぐにワゴンを押して戻って来た。

「殿下はもう間もなくいらつしやるかと」

繊細な手つきでヨハンは紅茶を淹れ、手慣れた様子で高い位置からカップに注ぐ。

女性二人がその姿に感動した時、廊下に続くドアからノックの音と衛兵の声がした。

「殿下がいらつしやいました」

ヨハンに言われ、三人は緊張して立ち上がる。

胸に手を当てて軽く頭を下げたヨハンを見て、三人もそれを真似た。

ドアが開き、アレクサンドルが入室する気配がする。

フラクシニア語で『失礼はなかったか？』『問題ございません』というヨハンとのやりとりが聞こえた。

「皆様、どうぞお顔をお上げください」

ヨハンの声が聞こえて三人は頭を上げる。

目の前には仕立てのいいタキシードに身を包んだ、金髪碧眼の皇太子が立っていた。

スポーツが得意だという彼は、胸板も厚く肩幅も広く堂々とした体格で、タキシード姿がとても格好いい。

金髪碧眼は、フラクシニアに来てヨハンや他の人である程度慣れたはずだ。だが一国の皇太子である彼は、殊更に特別な存在に思えた。

薄いプラチナブロンドは照明を反射して淡く輝き、瞳の色はただのブルーではなく、とても薄い色の青だった。見つめられると瞳孔が際立っているの、思わずドキッとしてしまう。

立っているだけで気品があり、近寄りたくない存在感があった。決して人を威圧する雰囲気ではないのだが、自然と人を従え、こうべを垂れさせる魅力がある。

「初めまして。日本からようこそいらつしやいました。今回は私の我が儘にお付き合い頂き、ありがとうございます」

丁寧な挨拶をして優雅に礼をするアレクサンドルの言葉は、流暢な日本語だった。

それに驚きつつも勝也を見れば、彼は小声で「俺のあとにフラクシニア語で挨拶してくれ」と優花に指示をした。

「このたびは一介の宝石商に過ぎない私をお呼び頂き、光栄の極みに存じます。私は富樫勝也と申します。彼女は鑑定士でデザイナーの足立沙梨奈。皇太子殿下におかれましては、大の日本びいきと伺っております。今晚の歓談で少しでも我が国について良いお話ができればと思っております」

勝也が日本語で挨拶をしたあと、優花は彼の指示通りフラクシニア語で挨拶をした。

『初めまして。私は通訳をしております、澄川優花と申します。このたびはご縁があり、この美しい国に來られたこと、非常に嬉しく思っております』

アレクサンドルは驚いた顔で優花を見る。背後で控えているヨハンも同様だ。

「君……。通訳か。フラクシニア語が話せるのか」

思わず口調が砕けたのは、アレクサンドルが心を開いた証拠だ。

「はい。幼い頃に少しだけフラクシニアに住んでいました」

優花の首には、フラクシニア産のピンクダイヤのペンダントが下がっている。

ピンクダイヤにしてはとても上質なものらしく、フクシアと呼ばれる濃いピンクほどの濃度がある。純度も高く混じりけがなく、カットも最高級だ。

幼い頃に両親がフラクシニアの友人から優花に、と受け取った物らしい。

「このペンダントは、その時の思い出なのでこの機会につけて参りました。両親の話では、フラクシニア産のピンクダイヤだそうです」

指先でそっとペンダントに触れると、優花の胸元を凝視していたアレクサンドルが一步踏み出す。

「——失礼。少し見させてもらっても？」

「構いません」

身長一八五センチ以上はあるかと思われるアレクサンドルが、ゆったりと優花の側に歩み寄る。

彼からはとても上品な香りがした。

仕事上さまざまな人に会うが、海外の人は高確率で香水をつけている。

だがアレクサンドルは今まで会ったどの人よりも、〴〵いい匂いだと思った。香りそのものというよりも、人物像と香りの印象がとても合っているのだと思う。

「失礼」

アレクサンドルの長い指が二十四金のチェーンに掛かり、そっとペンダントトップを持ち上げる。ティアドロップ——霏型にカットされたピンクダイヤは、他に装飾がなく実にシンプルだ。だがその分、ダイヤそのものの純粋なカットや輝きが際立っている。

「……………」

吐息がかかる距離にアレクサンドルの端正な顔があり、優花は一気に真っ赤になった。

身を屈めないと優花のペンダントが見えないほどの長身。少し俯くとセットされた金髪が、彼的美貌に影を落とす。伏せられた睫毛も白金で、間近で見ると彼の目はシベリアンハスキーのようだ。

ドキドキしつつ視線を彷徨わせると、こちらを羨ましそうに見ている沙梨奈と目が合う。その向こうにいる勝也は、嫉妬の混じった目を向けていた。

(あうう……。ふ、不可抗力……)

フラクシニアと縁があるということを言いたかっただけで、優花もこんな展開になるとは思わなかった。

やがてアレクサンドルは「ありがとう」と目の前で微笑むと、優花の手を取って甲にキスをする。「確かにこの石はフラクシニアの物のようだ。君はこの石によって、フラクシニアに呼び戻されたのかもしいね」

「……呼び戻された……」

アレクサンドルの言葉を復唱すると、何となく納得がいったような気がする。

宝石は特別な力を有している。パワーストーンを信じる人がいるように、勝也たちも石の相性などをよく口にしていた。

その中に、身の安全や原点回帰などの力がある石があったとしても、おかしくない。

殿下。富樫様よりたくさんのお土産を頂いています」

ヨハンの言葉にアレクサンドルがソファに腰掛けると、優花たちも再び座る。

アレクサンドルの側に立ったヨハンは、ワゴンの上に綺麗に並べたお土産を手で示した。

「こんなにあくさん持ってきてくれたんですね。ああ、好きな菓子がある。これも。あ、これも。……嬉しいな」

優花たちにとっては少し足を延ばせばどこでも買える菓子折りなのに、アレクサンドルは感動している。

ヨハンが江戸切り子のグラスセットが入った包みを開くと、アレクサンドルの整った顔が「ワオ」という歓声と共に喜色に彩られる。

「……綺麗だな。これは知っている。江戸切り子ですね？ 大切にします」

アレクサンドルの言葉を聞き、勝也が小さく拳を握ったのが見えた。

五色の江戸切り子グラスは、勝也が「重たい。割れないか気を使う」と文句を言いつつ運んできた物だ。それを喜んでもらえて、優花も嬉しい。

そのようにして和やかに始まった皇太子との会話は、やがてフラクシニアの印象や日本のことを教えてほしいというものへ変わる。

しばらくして美味しそうな食事の匂いが鼻腔に届くと、隣室にあるダイニングに向かった。テレビでしか見たことのないような長いテーブルに、ピカピカの食器がセットされている。更に、BGMとして静かなクラシックが流れた。

「どうぞそちらにお掛けください」

長いダイニングテーブルの上座にアレクサンドルが座り、勝也がその向かいに座る。優花と沙梨奈はサイドの長い部分の中央に座った。いずれも座る時は、ヨハンや給仕の男性が椅子を引いてくれるという高級レストランのような待遇だ。

目の前にあるナプキンは、複雑な形に折り畳まれている。

アレクサンドルがそれを無造作に広げたので、優花たちも真似をしてナプキンに手を伸ばした。

「メニューはこちらで決めさせて頂きましたが、特に食べられない物はないという認識で大丈夫で

しょうか？ 一応ミスター富樫とメールをさせて頂いた時に、同行者の好き嫌いやアレルギーを確
認致しましたが」

ヨハンの言葉に、優花たちは頷く。

幸いにも三人とも好き嫌いはない。沙梨奈は「納豆が食べられない」と言っているが、さすがに
フラクシニアで納豆は出ないだろう。

「大丈夫です。何でも食べます」

冗談めかした勝也の言葉にアレクサンドルとヨハンが微笑み、ヨハンがつけ加えた。

「メニューは完全なフラクシニアの料理……となると色々偏りますから、フラクシニアの食材を
使ったフレンチ仕立てになっています」

ドレス姿で食事をするのが初めてで、優花は緊張で口が渴きそうになるのを必死に唾で誤魔化す。
背筋を伸ばして顔を強張らせていたからか、ふとアレクサンドルがこちらを見てフラクシニア語
で話しかけてきた。

『フラクシニアに住んでいたそうですが、現在は日本に？』

問いかけつつ、アレクサンドルはグラスに入っている透明な液体を飲む。それはきつと水で、自
由に飲んでいいのだろうと解釈した優花は、ありがたく水を飲んで口を潤すことにした。

同時にそうやってさりげなく水を飲むよう促してくれたアレクサンドルは、親切で気配りのでき
る人だなと思う。

『はい。父が自動車会社に勤めていまして、子供時代は東南アジアを中心にヨーロッパやアメリカ

など、様々な国にいました。高校生になる頃に日本に帰国しています』

『色々な国にいて、いい思い出はありましたか？』

アレクサンドルの薄いブルーの目が、親しみを込めて優花を見つめる。

『そう……ですね。多くの国に友人ができたのは、今でも財産だと思っています。今こうして通訳
という仕事ができているのも、当時の経験があるからですし、今回このような光栄な場にいられる
のも、フラクシニアとご縁があったお陰です』

給仕がそれぞれの席を回って、食前酒であるシャンパンをフルトグラスに注ぐ。

勝也と沙梨奈は、フラクシニア語で優花とアレクサンドルが話していることが気になっているよ
うだ。特に勝也の視線を感じるので、あとで誤解がないように説明しなければと思う。

「……では、乾杯しましょうか」

アレクサンドルが日本語で言い、フルトグラスを掲げる。

優花たちも同様にフルトグラスを掲げると、アレクサンドルが「フラクシニアと日本の友好と
発展に」と微笑んだ。

運ばれてきた前菜はフレッシュサーモンのカルパッチョで、初夏らしくアスパラが使われて色彩
が鮮やかだ。

「いただきます」

フレンチのコースだが、優花はいつもの習慣で胸の前で手を合わせた。

それをアレクサンドルが、柔らかな視線で見ている。

「日本人の、その『いただきます』『ちそうさま』という習慣はいいですよね」

ふとそんなことを言われ、三人の日本人は何か答えようと慌てて口の中の物を呑み込む。

「ああ、お気になさらず。ただミズ澄川を見て思っただけです。どうか食事を楽しんでください」「ありがとうございます。確かに……こちらですと、敬虔な方は食前のお祈りですものね」

グリーンピースのソースが掛かったアスパラを呑み込んだ優花が言えば、アレクサンドルは嬉しそうに微笑む。

「他にも仏教国はありますが、日本人独特の挨拶が私は好きなのです。日常の中に労りや優しさが溢れているような気がして……。憧れますね」

「フラクシニアにも素敵な言い回しがありますよね？ 運命を感じた時、『星が瞬いた』と言うと子供の頃に覚えました」

優花がフラクシニアの慣習を口にする時、沙梨奈が「ロマンチック」と喜ぶ。

その後も両国の好きな点を話し、質問などを交えつつ食事が進む。

フレンチのフルコースが終わる頃には、アレクサンドルはすっかり上機嫌になっていた。

* * *

「もしピザとスケジュールの都合がつかのならば、一週間ほど宮殿に滞在しませんか？」

食後の紅茶を楽しんでいる時、アレクサンドルがとんでもないことを言い出した。

「え……えっ？」

勝也が動揺し、沙梨奈も「嘘でしょお？」という顔をしている。

確かに宮殿は素晴らしいし、アレクサンドルもヨハンも日本語で意思疎通ができるので夢のような申し出だ。だが外国滞在が長引けば、その分優花が勝也に請求する金額は跳ね上がる。

優花は勝也と長期契約しているものの、エージェントから他の仕事の紹介されれば、そちらで仕事をやる。長期契約には、勝也から仕事の依頼があれば最優先するという条件も含まれているが、勝也との契約だけで優花は生きていけないからだ。

それとは別に、通訳一回あたりの報酬は都度払いなので、滞在日数が長くなればなるほど、勝也の支払い額が増える仕組みになっていた。

チラッと勝也を見るが、彼は宮殿に泊まれるという驚きでそれどころではないようだ。

「もちろん、今回のお仕事で得られた宝石などは、警備された金庫でお預かり致します。当たり前ですが宿代なども請求致しません。昼間は私も執務がありますが、夜や空いた時間などに話し相手になって頂きたいんです」

アレクサンドルの申し出に、特にヨハンは動じない。彼は相変わらずアレクサンドルの後方に控えていて、主人が決めたことに口を出さない方針のようだ。

きっとアレクサンドルは何でもそつなくこなす人で、自身を追い詰めるスケジュールの立て方はしないのだと思う。その本人が泊まって話し相手になってほしいと言うのだから、滞在しても恐らく迷惑にはならないのだろう。

「どうですか？」

青い瞳に見つめられ、優花は勝也たちと視線を合わせる。

「わ、私は勝也さんがいいならいいけど」

口元に喜びを隠しきれない沙梨奈が言い、優花も「私も」と頷いた。

勝也は視線を空中に彷徨わせ今後のスケジュールを思い出していたようだが、ニカツと笑うと「よろしくお願いしますー」と決断を下した。

「決まりですね。ではヨハン、ミスター富樫たちのお部屋を用意しておいてくれ」

「畏まりました」

「あなたたちの荷物は、ホテルからこちらに引き取るよう手配致します」

「お気遣いありがとうございます」

勝也がきつちりと頭を下げ、優花と沙梨奈も礼をする。

「これからヨハンがあなたたちを客間にご案内しますから、荷物が届き次第おくつろぎください。バスルームなどの設備についてもヨハンから説明させます」

アレクサンドルの口調から、優花はこれでもう今日はお開きになるのだと予感した。

朝から商談があり、夜になれば皇太子と食事会。実に濃厚な一日だった。

（お風呂があるなら、お湯を溜めてゆっくり浸かりたいな）

ぼんやりと思いつつ豪華な内装を見ていると、優花の視界に突然アレクサンドルの整いすぎた顔が入り込む。

「っ!?」

ビクツとして顔を引いた優花を、アレクサンドルはキラキラとした目で見つめる。おまけに両手で手を包み込んできた。

「な……何でしょうか……」

驚きを隠せない優花に、アレクサンドルは好意を隠さず微笑みかける。

「ミス澄川。もしよければこれから私とバーで一杯飲みませんか？」

「バ、バー？」

面食らって言葉を反復すれば、彼は魅力的な笑みで別室の方を親指で示す。

「私室の一つに、備え付けのバーカウンターがあるのです。趣味でバーテンダーの真似事もしたいとして、一杯だけお付き合ひ頂けませんか？ フラクシニアに住んでいたというあなたと、お話がしたいのです」

一国の皇太子からナンパされ、優花は何と返事をすればいいのか口を喘がせる。

助けを求めて勝也と沙梨奈を見れば、勝也がちよいちよいと優花を手招きしている。

「ちよ、ちよっとすみません」

小さく会釈をして勝也の方まで行くと、彼が顔を寄せ耳元で囁いた。

「優花。この際だから色仕掛けでも何でもして、皇太子に気に入られて来いよ」

（……………え？）

心臓がドクリと嫌な音を立てたが、勝也は構わず言葉を続ける。

「このまま皇太子殿下のお気に入りになったら、うちも繁盛するかもしれないだろう？ 昼間の鉦山の所有者とも懇意になれるかもしれない」

「あ……、そ、そうですね……」

勝也の野心は分かっていたはずだ。だが仮にも求婚されている人から「別の男に色仕掛けをしろ」と言われると、内心穏やかではない。

それを見抜いたのか、勝也が小さく笑う。

「色仕掛けって言っても、俺を裏切るようなことはしなくていいから。それっぽく話をして気に入られば、それでいい」

「え……ええ」

少し強張った顔で頷けば、勝也がわざとらしく大きな声を出して優花の背中を叩いた。

「いやあ、光栄じゃないか優花！ ぜひとも日本と我が社を売り込んできてくれ」

周囲も笑顔なので優花はむりやり笑うしかない。

その後、勝也と沙梨奈はヨハンに客間へ案内されていった。優花はアレクサンドルと二人きりになり、あまりの緊張で卒倒しそうだ。

「じゃあ、私たちも行きましようか。ミズ……。私も優花と呼んでも？」

「え、ええ。構いません、殿下」

断れるはずもなく快諾すれば、彼は人懐こい笑みを浮かべた。

「では、私のこともサーシャと呼んでほしい」

「そんな、畏れ多いです」

「プライベートな時間に、私も新しい友人が欲しいのだけどね？」

そう言われると返す言葉もなく、優花はおずおずと彼の愛称を口にする。

「よろしく願います……。サーシャ」

優花の言葉にアレクサンドルは完璧すぎる笑顔で応え、肘を差し出す。それがエスコートの誘いだと理解し、優花はそつと彼の腕に手を掛けた。

廊下に出るとシンとしており、広々とした宮殿は豪華な迷路のようだ。

「そのドレス、とてもよく似合っているね」

「ありがとうございます」

「もっとフランクに話していいよ。私もそうする」

「え、ええ」

とは言え、一国の皇太子相手に友人のように話せなど、ハードルが高すぎる。

「優花の好きな酒は？ ジンベース、ウォッカベース、カシスなどのリキュールにクリーム系。色々な酒を揃えているから、大体の物は作れる」

「そうですね……。舌が子供っぽいので、カシスオレンジとか甘いお酒が好きです」

「可愛いな」

チラッとアレクサンドルの横顔を盗み見すると、彼は笑みを深めた。

「急同行人と離してしまってますまない。誓って危険な目に遭わせたりしないから」

「いえ、それは本当に殿下……サ、サーシャを信じています」

ぎこちなく名を呼べば、アレクサンドルは実に嬉しそうに笑った。

「私のことを警戒している？」

「い、いえ！ そんな……。でん……サーシャは生まれながらの紳士だと思っております。決してそのようなことは……」

優花は慌ててかぶりを振る。

そもそも一国の皇太子に女性として見られると思うこと自体、凶々しい妄想だ。

「ならいいんだが」

そう言い、アレクサンドルは階段を上って複雑に入り組む部屋のうちの一室に入った。

「ここが私室だ。続き間にリビングやベッドルームもあるが、今日はここで過ごそう」

「す、素敵なお部屋ですね」

城の内部だが、先ほどの迎賓室とは違ってこちらは近代的だ。実用重視の家具が目立ち、実際に彼がここで生活しているのが分かる。

アレクサンドルが言っていたように、その部屋にはバーカウンターとツールが並んでいた。カウンターの奥には数え切れないほどの酒瓶が並び、キャビネットには高級ブランドと思われる、様々な形のグラスがあった。

カーテンを閉めていない窓からは、トゥルフの夜景が一望できる。景観を守るために高層ビルやネオンは日本ほどないそうだが、繁華街と思われる方面は明るく美しい。

床にはベルシャ絨毯らしき高級な敷物。ゆったりとしたソファセットはモダンな物だ。壁には洋書が詰まった本棚が並び、側には一人掛けのリクライニングソファがある。

恐らくアレクサンドルは、ここで一人優雅な時間を過ごしているのだろう。「好きな場所に座ってくれ」

アレクサンドルはジャケットを脱いでハンガーに掛けると、シャツの袖を捲る。カウンターに置いてあったアームバンドで袖を留めた姿に、優花は思わず胸を高鳴らせた。

一般的な女性がそうであるように、優花も男性のスーツ姿が好きだ。しかしそれに小道具が加わると、一気に罪深いまでの色気を醸し出すので、心臓に悪い。

日本にいても、せいぜいスリーピースを纏った男性を見て「格好いい」と思う程度だった。しかしアレクサンドルを前にすると、彼が次にどんな色気を出してくるのか気持ちを持たない。

おずおずとカウンター前のツールに腰掛けると、優花はアレクサンドルの手元を見る。高身長に伴って手も大きい指はスラリとしていて美しかった。

左手の親指にある赤い宝石が嵌まった指輪は、恐らくフラクシニアの宝石なのだろう。優花のピंकダイヤよりもっと濃い色だ。

勝也からフラクシニアに来る前にカラーダイヤの話が聞かされていたのだが、その中でもレッドダイヤは特に稀少だそう。それを王族である彼が身につけているのを見て、なるほどと納得する。「じゃあ、君が好きならカシスオレンジをまず作ろうか」

そう言うと、アレクサンドルは細長いタンブラーにキューブアイスをついでカランカランと入

れる。カシスをメジャーカップの小さい方で量りグラスに入れると、冷えたオレンジジュースを注いでマドラーで混ぜる。

冷蔵庫から取り出した小さな密閉容器にはカットされたオレンジが入っていて、それをグラスの縁に挟んだ。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます……。本当に手慣れているんですね」

皇太子とは思えない鮮やかな手つきに、優花は本当に驚いていた。この美しい魔法の手なら、楽器の演奏やパソコンのキーボードを打つにも滑らかに動きそうだ。

「一日の終わりにには、ヨハンと飲んでいいるからね。その時に彼に練習台になってもらっているんだ」

悪戯っぽい言い方に、優花は思わずクスツと笑った。

「ああ、いい笑顔をもたらった。やっと心から笑ってくれたね、優花」

「え？ そ、そうですか？」

「立场上、色んな人の表情を見ている。作られた笑顔か、心からのものかはすぐに分かるさ」

焦って頬に手を当てる優花に、アレクサンドルは「先にどうぞ」とカシスオレンジを飲むよう勧めてくれる。言われて初めて、優花は自分がガチガチに緊張していることに気付いた。同時に、彼が氣遣って気さくに振る舞ってくれたのだと知る。その心遣いがあったかった。

一口飲んだカクテルは異国のオレンジジュースの味がし、甘さの中のほんの少しの酸味が美味し

かった。

その後アレクサンドルは、自分用にジンライムを作り、カウンターに立ったままロックグラスを傾ける。

「音楽でもかけようか。沈黙は人を緊張させるからね」

小さな音をさせてグラスを置くと、アレクサンドルはコンポが置かれているチェストに向かう。CDをセットしてやがて流れたのは品のいいジャズだった。

「とてもストレートな質問をするが、優花はミスター富樫と恋人同士？」

「つごふっ」

いきなりな質問に、優花は飲んでいたカシスオレンジに思いきり噎せた。ひどく咳き込み、心配したアレクサンドルが背中をさすってくれる。

「すまない。急な質問すぎたね」

「い、いえ……。どうしてです？」

涙目になった優花は、マスカラが滲んでいないか不安になりながら尋ねる。

「フラクシニアにいたことがあるという君に、純粹な興味が湧いた。それに、そのピンクダイヤにも興味があるしね」

「ピンクダイヤ……。これ、ですか？ 頂き物ですが……」

胸元にある宝石に触れると、アレクサンドルはじつとそこを見つめてくる。胸元を見られるのが恥ずかしくて、優花はそつと手を外した。

「宝石に石言葉というものがあるのは知っているね？」

「はい。今回の仕事に関して調べましたが、ピンクダイヤは愛を表す言葉や、婚約指輪にするに相応しい『完全無欠の愛』という意味があると知りました」

「そうだ。だがこのフラクシニアでは、原産国ならではの言い伝えがある」
「言い伝え……ですか？」

それは聞いたことがなく、優花は隣に座るアレクサンドルをきよんと見ると見る。

「女性がフラクシニアの宝石を贈られると、贈った男性と結婚するという言い伝えがある。だから近年では、海外に進出したいと望む女性は宝石から距離を取ろうとするんだ」

「それは……。初耳です」

聞いた限りおそらくは、迷信……なのだろう。

だが現代においても古い師やシャーマンを頼る人がいる以上、こういった事柄を『嘘』とは言えない。人、土地、状況により迷信は真実になるのだ。

「まあ、信じて綺麗なもの綺麗と、喜んで宝石を受け取る女性もいるけれどね」

優花の考えを見透かしたのか、アレクサンドルがクスツと笑う。

「サーシャはその言い伝えを信じていますか？」

「どうだろうね。あつたら素敵だな、とは思っている」

肯定せず否定もしない。それは大人の答えだと優花は思った。

「でもだからこそ、幼い頃にフラクシニア産のダイヤを手にした優花なら、フラクシニアの男と恋

に落ちる可能性もあるかな？ と思っただ」

アレクサンドルの言葉がようやく「富樫と恋人か？」という唐突な質問に繋がりが、優花は先ほど噎せた時の焦りを思い出す。

「フラクシニアの男って……」

「もちろん、私のことだ」

アレクサンドルはそう言って、アイスブルーの瞳で結花をジッと見つめる。熱っぽい眼差しにドキツとするが、相手は外国の皇太子で、その荒唐無稽さに優花は首を振って笑った。

「何を仰っているのですか？ 冗談はいけませんよ？」

「おや、冗談に聞こえるかな？」

スツールに腰掛けて長い脚をゆったりと組み、アレクサンドルはじっと優花を見る。

瞳孔が際立つ薄い色の目に見つめられ、優花はドギマギして目を逸らした。

（こんなの……。きつと現実じゃない）

場所は宮殿で、目の前にいるのは皇太子。自分はドレスを着ていて、まるで夢の世界だ。

だからそんな世界で皇太子に口説かれたように思っても、きつとそれは気のせいに違いない。

「……お、お仕事はいいのですか？ 皇太子殿下ってとてもお忙しそうないメージがありますけれど」

あからさまに話題を逸らせば、アレクサンドルは眉を上げて溜め息をついた。

「今日の執務は夕方までに済ませておいた。下手なことをすればヨハンに怒られるしね。これから

一週間優花たちが滞在しても、私のスケジュールに差し障りはない」アレクサンドルはじつと優花の目を見つめたまま話す。

相手の目を見て話すのは礼儀だ。優花もそのように話す習慣がついているものの、アレクサンドルの目に見つめられるとドキドキする。

「……優花。そんなに私の言葉は薄っぺらいか？」

ふとアレクサンドルが優花の手を取り、そつと甲に唇をつけた。

「な、何をなさるんですか！」

驚いて手を引こうとするが、しっかり握られていて動かない。

「では、もつとストレートに言おう。私は優花に強い興味を持っている。惹かれていると言つてくさ」

「……………」

強い目が優花を射貫き、もう一度温かい唇が手の甲に押しつけられた。

今度はなんと言つて躲かわかしていいのかわからず、優花は顔を真っ赤にして言葉を失う。動揺がアレクサンドルに伝わつてしまいそうなほど、掴つかまれた手がブルブルと震えた。

「子ウサギのように震えて……。そんなに私が恐ろしいか？ それとも、私のような男の言葉は信じられない？」

そう言われるものの、やはり優花はどう答えるべきなのか戸惑う。

完璧な美を誇る彼を前に、優花は自分がとても矮小わいしょうに思えてきた。

必要以上に自分を卑下ひげする趣味はないが、これといった特技もないのにアレクサンドルに惚ほれれる要素が見つからない。

勝也とだつて一年以上の付き合いがあり、何度も食事やデートを重ねて今に至る。

キス以上のことはされていないものの、それは勝也が本気である証拠だと思つている。

でもアレクサンドルはどうだろう？

初対面で口説いてくる理由に皆目見当がつかない。

怖いし、不安だ。

からかわれているのなら、本気にした自分があとで馬鹿にされて笑いものになる。

優花はそれを恐れていた。

「……サーシャだつて、出会う女性全員を同じように口説いていると思われするのは、本意ではないでしょう？」

強張こわばった顔のまま静かに言つと、彼は「してやられた」という顔で苦笑する。

「確かにそう思われては心外だ。では、優花はどんな言葉が欲しい？ 何を言われたら安心する？」面白そうに輝いているアレクサンドルの目は、新しいゲームでも楽しんでるかのようだ。優花の反応をつぶさに見て、どうやったら上手に攻略できるかを頭の中で素早く計算しているように見える。——考えすぎなのかもしれないが。

「私が望む言葉を言つて私を安心させて、サーシャは満足なのですか？ ……すみません。私、何言っているんだろう」

ひねくれた言葉を言って、アレクサンドルを困らせるつもりはない。ただ優花は、この自分が自分でなくなりそうな状況から逃げたいのだ。

「あの……私、自分がとても普通だと分かっているの、サーシャみたいな人に突然そういうことを言われると、どうしていいのかわからないのです。からかわれていると知って大人の対応をすればいいのか、真に受けて小娘みたいに恥じらえばいいのか……本当に分からなくて」

混乱の果てに、優花は思っていることをすべてぶちまけた。

言葉が素直になると、体も素直になる。

顔は真っ赤になったまま目を合わせられず、視線は彼のネクタイのあたりに落ちる。

『……参ったな』

ふとアレクサンドルはフラクシニア語で吹き、口元を覆って酒瓶が並んでいる方を見た。

（……ああ、呆れられたんだ。男性を上手にあしらうこともできない子供だって、幻滅させちゃった。でも、本当にこんな風に口説かれたことなんてないから、分らないんだもの）

優花が気まずく黙っていると、アレクサンドルが両手で優しく手を包み込んできた。

「……え？」

それまでの追い詰めるかのような態度とは異なる雰囲気顔を上げれば、どこか照れた顔のアレクサンドルが微笑んでいた。

「私が思っていたより、優花はずっと素直で純粋な女性だった。試すような物言いをしてすまない」

「……え、あ……はこ」

（試されていたの？）

状況が理解できず、優花は内心で首を傾げる。

「私の思いを素直に言おう。もともと私が日本びいきだということは知っているね？」

「はい。フラクシニアの国営サイトにもそのように書かれています」

「私はアジアという神秘に包まれた地域がとても好きで、その中でも日本のことを格別に愛している。学生時代に留学したこともあるし、このフラクシニアに積極的に日本食のレストランや直営ショップを作ろうと試みている。日本人が食べる物はとてもヘルシーで有名だから」

「そうですね。納豆とかは好き嫌いがありますが、味噌や醤油、豆腐やしらすきなどはヨーロッパにも進出していると聞きます」

先ほどの甘い雰囲気とは打って変わって、会話の内容はとても真面目だ。何がどうなって日本の話になったのか分からないが、こういう雰囲気なら優花は饒舌になれる。

「加えて私は日本人女性が好きだ。日本人の真っ直ぐな黒髪や、控えめなようできて芯の強い性格に惹かれている。自然と誰かのために動く心とする心が根付いているのも、とても素敵だと思うんだ」

「ありがとうございます」

ひとまず彼の言葉に、日本人女性を代表して礼を言う。

「優花からはそれを感じられた。クライアントであるミスター富樫を気遣い、当たり前前に私たちに

も気を使ってくれる。フラクシニア語が話せるのも好感が持てるし、世界中を見て回ったという経験も尊敬に値する」

「……褒めすぎ、です」

面映おもはゆくなつてまた視線を落とした優花の手を、アレクサンドルは何度も優しく撫でる。

「私は君の経験すべてに敬意を表する。だから……好意を抱いたんだ」

先ほどもでの熱っぽい眼差しから一転、アレクサンドルは柔らかな視線を注いでくる。

「ありがとうございます。ご好意は嬉しいですが——」

きっぱりと断ろうとして、優花はハッと勝也に言われた言葉を思い出した。

『この際だから色仕掛けでも何でもして、皇太子に気に入られて来いよ』

途端にふわふわしていた気持ちが冷え、嫌な汗が浮かぶ。

（そうだ。私は個人でフラクシニアに来ていてはなくて、勝也さんの通訳として滞在しているんだ。クライアントである彼の利益になることを考えなくてはいけなくて……）

果たしてそれは通訳の仕事の範疇はんちゆうなのだろうか？ という疑問はある。

それに勝也のため、彼の会社のために色仕掛けをしようと思うと、素直に従う気持ちになれない。

だがここで「皇太子のお客さん”をしていただけなら、あとで勝也に何と言われるか分からない。

胸の奥にぎこちない決意が生まれ、優花はそっとアレクサンドルの手を握り返す。彼は「おや？」という顔をしたが、優花を探るように見つめつつ指を絡ませてくる。

「……私の気持ちに応えてくれようとしている、と考えていいのかな？」

「お、お話を聞く程度なら……と」

「ふむ」

優花の態度をどう取ったのか、アレクサンドルは一度頷いて手を離した。

立ち上がり、バーカウンターを回り込んで向こう側に立つ。

「それならば、もう一杯ぐらい飲んでおこう。優花、君のフラクシニアでの思い出を話してくれるか？ 私も自国のことを聞けると嬉しいから」

「あ、はい」

心配していた展開にならずホッとして、優花は残っていたカシスオレンジを飲み干した。アレクサンドルに「何が飲みたい？」と聞かれ、「甘い物でお任せします」と頼む。

彼はレシピを見ることなく、流れるような手つきでカクテルを作り始める。

ベースとなる酒が琥珀色こはくいろだったので、ブランドーなのだろう。それに白い液体——生クリームが注がれ、ボトルに『カカオ』と書かれた酒がシェイカーの中に注がれる。

シャカシャカと小気味いい音を立ててシェイカーを振る姿に、優花は思わず見とれた。背後でジャズが流れていることもあり、まるで映画のワンシーンのようだ。

やがてシェイカーを振る速度がゆっくりと落ち、優花の目の前に冷やされたカクテルグラスが出された。シェイカーの中身がトロリと注がれる。

「どうぞ。アレキサンダーです」

芝居がかった口調で勧められたカクテルは、奇しくも彼の名と似ている。

それがどうにもロマンチックで、気恥ずかしい。

「あ、ありがとうございます……」

チョコレート色のカクテルの香りを嗅ぐと、ベースとなるブランデーの香りと共にカカオの美味しそうな匂いもした。

「いただきます」

グラスに唇をつけ一口飲むと、チョコレート甘さと生クリームの滑らかさに思わず笑顔になった。ブランデーのアルコールによって、あとから体がポツと熱くなる。

「美味しい！」

「ブランデーは控えめにしておいだけれど、甘いからといって油断したら酔ってしまうからね」

その気になれば酔わせてしまうことだってできるのに、アレクサンドルはどこまでも紳士だ。

「私、今まで全然カクテルのことを知らなかったんだなって思います。居酒屋とかに出る有名なのしか知りませんでした。興味を持たなかったというか……」

「世界は素晴らしいもので満ちている。一つを徹底するのも美しいし、多くを知ろうとするのも美しい」

歌うように言った彼は、自分用にまたジンライムを作った。

「人のあり方を『美しい』と言えるのって……素敵ですね」

思わず本音をポツリと呟くと、アレクサンドルが魅惑的に微笑む。

「それは……単純に褒めている？ それとも私に興味を持ったと思っただけ？」

「う……」

誤魔化すように、口に含んだ甘いお酒をごくんと嚥下する。アルコールではない理由で優花の顔が赤くなっていく気がした。

（ダメダメ。ときめいていないで、勝也さんのために色仕掛けしないとならんんだから）

お腹の奥でぐつと決意し、優花はアレクサンドルにフワリと微笑みかけた。

「きよ……興味は、ありますか？」

目を伏せ気味にし、食事が終わったあとと隣接していた化粧室で直した唇を少し強調するように、ちよんと突き出す。リップティントの艶を強調したあと、カクテルを静かに飲んだ。

ゆつくりと脚を組むと、イブニングドレスのスリットから膝下が覗く。カウンターに肘を突けば、Eカップの胸の谷間が強調された。

チラリとアレクサンドルに目をやると、彼は少し驚いた顔をして優花の谷間を見ている。

（よし！）

内心ガッツポーズを取り、優花はそのままスツールを回転させアレクサンドルに向き直った。

その時にワインレッドのドレスの間から、薄いストッキングに包まれた脚が覗く。

沙梨奈が言っていたようにキャバ嬢が着るような深いスリットが入っていれば、もつとセクシーに太腿が出ていたかもしれない。だが今回はフォーマルなお呼ばれなので、あまり肌を出しすぎないものにした。このくらいなら見られても何とか平常心を保てる。

「フラクシニアでの私の思い出ですが、特にこれと言って珍しいものはないのです。まだ小学校に

上がる前の年齢でしたし、母に連れられて家と幼稚園、公園やスーパーの往復でした。白夜とオーロラの思い出も、薄らとあります。ですが小学校入学と同時に、親の転勤で別の国に移ってしまいました」

「もしかしたら、私は街角で君を見ていたかもしれないね？」

アレクサンドルはニツと笑い、組んだ脚のつま先でツウツと優花の脚をなぞり上げた。

(えっ……!?)

ドレスの薄い布地越しにツルリとしたエナメル靴の感触がし、優花はビクツと足を跳ね上げ目をまん丸にした。

「どうした？ 優花」

驚いて彼を凝視しているというのに、アレクサンドルは大人の余裕たっぷりな笑みを深める。

(け、経験不足の小娘ですってバレたら、終わりの気がする……っ)

かろうじて笑顔はキープしたものの、がちがちに強張っている自信があった。

「こ、こういうことをされたことがなかったので、ちよつとビックリ……しました」
すると彼は楽しそうに目を細めた。

「優花が魅力的だから、私も相應の態度を取らなければ失礼だと思って」

言いつつも彼のつま先は器用に動き、優花のふくらはぎのラインを撫で回している。

こういうシーンは女スパイが活躍する映画で見たことはある。しかし実際に自分がアプローチされるかどうか反応すればいいのかわからず、優花は泣きそうになった。

だというのに、アレクサンドルは優花の手を取ってまた甲に口づける。

「え……っ」

先ほどは挨拶程度のキスだったが、今度は手首、腕、肘……と、どんどん場所を上げてきた。

「ちよ……っ、ちよおっ、ま、ままつて!？」

焦って身を引こうとするが、それよりも早くアレクサンドルが立ち上がった。

カウンターに両手を突き、腕の中に優花を閉じ込めてしまう。驚いて彼を見上げると、捕食者の目が笑っていた。

「あの……」

「キス、させてくれないか？」

「えっ？」

突然の申し出に上ずった声が出て、身動きできないスツールの上で優花は体を小さくする。

「君がミスター富樫のために私にモーションを掛けようとしたことぐらい、分かっている。滞在中に君が構ってくれるのなら、彼にとつて悪くない条件を採掘会社の社長に伝えておこう」

「なっ……ず、狡い……」

体を差し出せと言われているかのような物言いに、優花の顔から血の気が引いていく。

「先に『そういう』要求を見せたのはそちらだろう？ 私は一時の味見のために君に手を出すつもりはない。長期的に考え、澄川優花という一個人と懇意になりたいと思っている」

「どうしてですか？ 私のような者といっても、あなたに得はないでしょう」